『ラクシュミー・タントラ』第 5 章訳註（3）
―感覚器官の出現と分類―

三　澤　祐　嗣

1　はじめに

本稿は「『ラクシュミー・タントラ』第 5 章訳註（1）― 3 種のグナによる顕現―」（『東洋学研究』54 号、2017 年、pp. 47–58）、「『ラクシュミー・タントラ』第 5 章訳註（2）―マハットとアハンカーラの顕現―」（『東洋学研究』55 号、2018 年、pp.51-59）に続くものである。『ラクシュミー・タントラ』（*Lakṣmītantra*、略号：LT）の創造説では、他のパーンチャラートラ派の文献と同じく、現象世界の創造は「不浄なる創造」（śuddhetarasṛṣṭi、清浄とは別の創造）と呼ばれ、「清浄なる創造」（śuddhasṛṣṭi）と区別して考えられている。第 5 章の「物質的根源に関する創造」（prākṛtasṛṣṭi）説は、この不浄なる創造（śuddhetarasṛṣṭi）に含まれ、特に、サーンキヤ思想の影響が強く見られるが、他の思想とも折衷、融合させ、独自の理論を築いている。この第 5 章の創造説は 3 つの段階に別れており、「最初の段階」（ādya parvan）、「中間の段階」（madhyama parvan）、「3 番目の段階」（tṛtīya parvan）と呼ばれる。「最初の段階」は、3 女神とヴューハ神を根源とする男性神と女性神の組み合わせの顕現である。すなわち、ラジャス性のマハーシュリーとプラディユムナの部分からブラフマーとアンブジャー（ラクシュミー）が、タマス性のマハーマーヤーとサンカルシャナの部分からルドラとトライー（サラスヴァティー）が、マハーヴィディヤーとアニルッダの部分から、ヴィシュヌとガウリー（パールヴァティー）が生まれる。さらにマハーラクシュミーの命令によって、神話通り、ブラフマーとトライー、ルドラとガウリー、ヴィシュヌとアンブジャーがそれぞれ夫婦となる。「中間の段階」では、夫婦となった神たちが、創造、維持、破壊の機能を行使する。ブラフマーとトライーが卵を創造し、ルドラとガウリーがそれを分割し、さらにその卵の中にブラフマーとトライーがプラクリティ（根本原質）を創り、ヴィシュヌとアンブジャーがそれを維持する。「3 番目の段階」では、未顕現から顕現、すなわちプラクリティから順次展開していいく。ヴィシュヌは、プラダーナを水に変えて、ラクシュミーとトライーを伴って水に横たわり、眠りにつく。次にヴィシュヌの臍から蓮華が生まれ、この蓮華からブラフマーとトライーが生まれる。蓮華・ブラフマー・トライーの組み合わせがマハットと呼ばれ、次にアハンカーラが出現し、そこから微細要素の展開へと続く。本稿では、アハンカーラからの別の展開である感

覚器官の出現から始まる。

2 『ラクシュミー・タントラ』第５章「物質的根源に関する創造の明示」第 49–85 偈

ahaṃkārasya yāv aṃśau rajaḥsattvasamāśrayau /

vaikārika iti proktaḥ sāttviko ’ṃśas tayoḥ paraḥ // LT 5.49

taijasaḥ kathitaḥ sadbhis tayoḥ sr̥ṣṭim imāṃ śr̥ṇu / LT 5.50ab

アハンカーラ（自我意識）の２つの部分[1]は、ラジャスとサットヴァに基づくが、その２つのうちのサットヴァ性の部分はヴァイカーリカと言われ、その２つのうちの他方〔の部分〕がタイジャサであると、識者達によって語られた。この創造をあなたは聞け。

vaikārikād ahaṃkārād āsīc chrotrādidhīndriyam // LT 5.50cd

（サットヴァ性の）ヴァイカーリカ・アハンーラから、耳（聴覚）などの知覚器官（dhīndriya）[2]〔の展開〕があった。

karmendiyaṃ ca vāgādi taijasāt saṃpravartate /

ubhayasmāt tataś cāsīd buddhikarmendriyaṃ manaḥ // LT 5.51

そして、発声器官（vāc）などの行為器官は、（ラジャス性の）タイジャサ〔・アハンカーラ〕から現れた。そしてそれ故、両方から知覚・行為器官であるマナス（思考器官）〔の展開〕があった[3]。

1　前偈［三澤 2018］までにタマス性のブーターディ・アハンカーラについて説明されたので、残りの２つの部分、すなわちサットヴァ性のヴァイカーリカ･アハンカーラとラジャス性のタイジャサ･アハンカーラについて、これから説かれる。

2　すなわち、5 つの “buddhīndriya” のこと。

3　タイジャサ・アハンカーラから行為器官の展開は、古典サーンキヤの説と異なる。*Sāṃkhyakārikā* 25 では、マナス、知覚器官（jñānendriya）、行為器官（karmendriya）はサットヴァ性のヴァイカーリカ・アハンーラから展開し、タイジャサ・アハンカーラは両者に展開するとされ、ラジャスは活動因としての性質が強調されている。また、パーンチャラートラ派の教典 *Ahirbudhniyasaṃhitā* 23cd–40 の説でも、同様に、知覚器官（jñānendriya）と行為器官（karmendriya）はヴァイカーリカ・アハンーラから展開するとされる。Schrader は、この *Ahirbudhniyasaṃhitā* の説について、ヴァイカーリカ・アハンカーラからマナスが展開し、タイジャサ･アハンカーラは知覚･行為器官の両方に均等に作用するとしているという［Schrader 1916: pp. 87–88］。しかし、教典自体には、マナスはただアハンカーラから展開するとされるのみで、3 種のグナとの関連性は説かれていない。さらに、タイジャサ・アハンカーラについても古典サーンキヤのように両方に展開するとは説かれていないが、これは、創造における活動因としてヴィシュヌの意欲（円盤、sudarśana）や熟慮（samīkṣayaiva）が強調されているために、活動因としてのラジャス性についてあえて関与させないよう、古典サーンキヤの説を再解釈して取り入れいているためと考えられる［三澤 2015: pp. 141–144］。この LT でも活動因としてのラジャスが強調されておらず、ラジャス性のマハーシュリーが活動因となっている［三澤 2017: pp. 47–50］［三澤 2018］。そのため、タイジャサ・アハンカーラを行為器官の展開という役割に置き換えたと考えられる。また、マナスがヴァイカーリカとタイジャサの両方から展開することが説かれるのも、LT 独自のものと考えられる。Krishnamacharya の註釈では、「ヴァイカーリカから知覚器官の、そして、タイジャサから行為器官の生起があると、ここで区分の想定がある。しかし、ウパニシャッドの学者たちは、あらゆるインドリヤもヴァイカーリカから生起すると説明する。さらに、サーンキヤの説に倣えば、マナスは両方のインドリヤの性質である。一方、ウパニシャッドの学者の説では、知覚器官（jñānendriya）の性質のみである。」（“vaikārikāt jñānendriyāṇāṃ,

śrotraṃ tvak caiva cakṣuś ca jihvā ghrāṇaṃ ca pañcamam /

buddhīndriyāṇi pañcāhuḥ śaktir eṣā madātmikā // LT 5.52

実に、耳（śrotra）、皮膚 (tvac)、目（cakṣus）、舌（jihvā）、第 5 の鼻（ghrāṇa）は、5 つの知覚器官（buddhīndriya）と言う。これがシャクティ（知覚のシャクティ）[4] であり、わたしの性質をもつものである。

vāk ca hastau ca pādau ca tathopasthaṃ ca pāyu ca /

karmendriyāṇi pañcāhuḥ śaktir eṣā madātmikā // LT 5.53

発声器官（vāc）、両手（hastau）、両足（pādau）、および生殖器官（upastha）、肛門（排泄器官、pāyu）は、5 つの行為器官と言う。これがシャクティ（行為のシャクティ）[5] であり、わたしの性質をもつものである [6]。

yā sā vijñānaśaktir me pāraṃparyakramāgatā /

buddhīndriyāṇy adhiṣṭhāya viṣayeṣu pravartate // LT 5.54

連続して段階的に降下する、わたし [7] の知覚のシャクティ（vijñānaśakti）は、諸々の知覚器官を統御して、対象へと向かう [8]。

kriyāśaktiś ca yā sā me pāraṃparyakramāgatā /

karmendriyāṇy adhiṣṭhāya kartavyeṣu pravartate // LT 5.55

また、連続して段階的に降下する、わたしの行為のシャクティ（kriyāśakti）[9] は、諸々の行為器官を統御して、作用対象 [10] へと向かう。

---

taijasāt karmendriyāṇāṃ cotpattir iti bhedaparikalpanam atra. aupaniṣadās tu — sarveṣām apīndriyāṇāṃ vaikārikād utpattim ācakṣate. tathā manasa ubhayendriyatvaṃ sāṃkhyamatarītyā. aupaniṣadamate tu jñānendriyatvam eva.” ［Krishnamacharya 1959: p. 21］）と説明される。このサーンキヤ説とは *Sāṃkhyakārikā* 27 のことで、そこでは、両方の性質を持つがゆえにマナスは、知覚器官・行為器官と同じインドリヤであると解される。

4　LT 5.54 で説かれる “vijñānaśakti” のこと。

5　LT 5.55 で説かれる “kriyāśakti” のこと。

6　シャクティは段階的に語られる。LT 第 2 章では創造と還滅のための意欲を特徴とするナーラーヤナのシャクティとその彼女に帰される 6 つの属性の一つとしてのシャクティが説かれており、おそらく最高処のシャクティと属性としてのシャクティが想定されていると考えられる［三澤 2015: pp. 303–305］。一方ここでは、知覚と行為を促すものとして 2 種のシャクティが説かれる。清浄な創造から物質的創造へと移行した段階であるが、女神の本質は変わらないということであろう。Gupta は、この 2 種のシャクティを「根源的シャクティの顕現」と説明している［Gupta 2000: p. 31］。

7　わたしとはラジャス性の形態を取ったマハーシュリーと考えられる［三澤 2017: p. 48］。シュリーあるいはシャクティは、創造のそれぞれの段階において、その中に入り意欲により創造を促す［三澤 2018］。

8　Gupta は「感覚器官は無知覚であり、シャクティとの接触によってのみ作用することができる。」と説明する［Gupta 2000: p. 32］。すなわち、シャクティがなければ、感覚器官は対象を把握できないということ。

9　LT 2.48 では、アニルッダに配置される属性である「潜在力」（śakti）と「光輝」（tejas）のうち、前者を “kriyāśakti” と説いている［三澤 2015: pp. 309–310］。

10　“kartavya” とは、なされるべきこと、すなわち行為器官の作用が働く対象である。LT 5.62 より説かれる。

śrotrasya viṣayaḥ śabdaḥ śravaṇaṃ ca kriyā matā /

tvacaś ca viṣayaḥ sparśaḥ sparśanaṃ ca kriyā matā // LT 5.56

cakṣuṣo viṣayo rūpaṃ darśanaṃ ca kriyā matā /

jihvāyā viṣayo rasyo rasanaṃ ca kriyā matā // LT 5.57

ghrāṇasya viṣayo gandha āghrāṇaṃ ca kriyā matā / LT 5.58ab

耳の対象は音声であり、また、〔その〕作用は聞くこととみなされる。そして、皮膚の対象は接触であり、また、〔その〕作用は接触することとみなされる。目の対象は色であり、また、〔その〕作用は見ることとみなされる。舌の対象は味であり、また、〔その〕作用は味わうこととみなされる。鼻の対象は香りであり、また、〔その〕作用は嗅ぐこととみなされる。

vṛ̥ttayo viṣayeṣv asya śrotrādeḥ śravaṇādayaḥ // LT 5.58cd

ālocanāni kathyante dharmimātragrahaś ca saḥ / LT 5.59ab

諸々の対象におけるこの耳などの機能である聞くこと（śravaṇa）などは、知覚（ālocana）と語られる。そしてそれは、特性をもった事物を把握するものである[11]。

dik ca vidyut tathā sūryaḥ somo vasumatī tathā // LT 5.59cd

adhidaivam iti proktaṃ kramāc chrotrādipañcake /

adhibhūtam iti proktaḥ śabdādyo viṣayaḥ kramāt // LT 5.60

また、方角（diś）、雷光（vidyut）および太陽（sūrya）、月（soma）そして大地（vasumatī）は、耳などの 5 つからなるものに対して、順次、統括する神（adhidaiva）と呼ばれる。音声などの対象は、順次、物質的なもの（adhibhūta）と呼ばれる[12]。

śrotrādipañcakaṃ tv etad adhyātmaṃ parikīrtitam /

śrotrādeḥ sāttvikāt sṛ̥ṭir viyadādivyapekṣayā // LT 5.61

tena bhautikam ity uktaṃ kramāc chrotrādipañcakam / LT 5.62ab

実に、この耳などの 5 つからなるものは、身体的なもの（adhyātma）と言われる。空な

11　Krishnamacharya は「知覚（ālocana）と呼ばれるものは、音声などの諸々の性質（dharma）の明瞭な把握の中で、単なる事物の把握である。それはまた、不明瞭なものでもある。そして、『知覚（ālocana）の知識は、最初は無分別である。幼児や口のきけない人などの認識に似ている。単純な事物に由来するものである。』と言う。」（“ālocanaṃ nāma śabdādidharmāṇāṃ sphuṭagrahaṇam antarā vastumātragrahaṇam. tad apy asphuṭam eva. āhuś ca — “asti hy ālocanaṃ jñānaṃ prathamaṃ nirvikalpakam. bālamūkādivijñānasadṛśaṃ mugdhavastukam.” iti.”［Krishnamacharya 1959: pp. 21–22］）と説明しており、“asti” 以下の引用は Kumārila の *Ślokavārttika* である。*Sāṃkhyatattvakaumudī* 27 においても同じ箇所が引用されており、そこでは、知覚器官により無分別に把握された対象はマナスにより分別されると説かれる［金倉 1984: pp. 162–164］。

12　LT 5.38–42 において、音声（śabda）などの五感の対象はそれぞれの微細要素（tanmātra）から生み出される属性と説かれる［三澤 2018］。ここでの音声などはその属性としての対象であると考えられる。

どの相互関係によって（？）[13]、耳などはサットヴァ性〔のアハンカーラ〕から生まれる。それ故、耳などの5つからなるものは、順次、物質に関するもの（bhautika）と呼ばれる。

vācas tu viṣayaḥ śabdo vacanaṃ ca kriyā matā // LT 5.62cd

hastendriyasya cādeyam ādānaṃ ca kriyā matā /

pādendriyasya gantavyaṃ gamanaṃ ca kriyā matā // LT 5.63

upasthasya tadānandyam ānandaś ca kriyā matā /

visṛjyaṃ viṣayaḥ pāyor visargaś ca kriyā matā // LT 5.64

さて、発声器官（vāc）の対象は音声であり、そして、〔その〕作用は話すこととみなされる。そして、手の器官の〔対象は〕取られるべきものであり、〔その〕作用は掴むこととみなされる。足の器官の〔対象は〕、行かれるべきもの（到達すべきところ）であり、また〔その〕作用は行くこととみなされる。生殖器官の〔対象は〕その喜ばせられるべきものであり、また〔その〕作用は喜ぶこととみなされる。排泄器官の対象は排出されるべきものであり、また〔その〕作用は排出することとみなされる。

hastādikaṃ catuṣkaṃ yat tat pañcaviṣayātmakam /

agnir indraś ca viṣṇuś ca tathaivādyaḥ prajāpatiḥ // LT 5.65

mitraś ceti kramāj jñeyā adhidevā vicakṣaṇaiḥ / LT 5.66ab

手などは4つからなるものであり、それは5つの対象の性質を持つ[14]。〔行為器官に対して、〕アグニ、インドラ、ヴィシュヌ、さらに最初のプラジャーパティ、そして、ミトラという統括する神々（adhidevāḥ）が知者によって、順次、知られるべきである。

śabdaḥ pañcātmakaṃ caiva vāgāder viṣayo hi yaḥ // LT 5.66cd

so ’dhibhūta iti prokto vāgādyadhyātmam ucyate /

manas tu sahakāry asminn ubhayatrāpi pañcake // LT 5.67

そしてまさに、5つからなるものに音声（śabda）がある。実に、発声器官（vāc）などの対象であるもの、それは物質的なもの（adhibhūta）と呼ばれる。発声器官（vāc）など

13　空などとは5粗大元素（mahābhūta）のことと考えられるが、LT 5では明示されていない。LT 5.42以下に説かれる粗大な存在物（sthūlabhūta）の微細な状態と思われるが、感覚器官の対象と関連付けられているのみで、感覚器官そのものとの関係については説かれていない［三澤 2018］。

14　4つとは、行為器官のうち発声器官（vāc）を除いた4種のことである［Gupta 2000: p. 32］。この4と5の関係について、*Sāṃkhyakārikā* 34には、「発声器官（vāc）は声が対象である。しかし、残りは5が対象である。」（vāg bhavati śabdaviṣayā śeṣāṇi tu pañcaviṣayāṇi //［Bhaṭṭācārya 1967: p. 226］）と説かれる。すなわち、発声器官（vāc）は音声のみを対象としており、残りの手（hasta）・足（pāda）・生殖器官（upastha）・排泄器官（pāyu）の4つは、音声（śabda）・接触（sparśa）・色形（rūpa）・味（rasya）・香り（gandha）の5つすべてを対象としているということである。さらに、*Sāṃkhyatattvakaumudī* を参照すれば［金倉 1984: pp. 182–183］、ここでの対象は、微細要素ではない属性としての対象であり、例えば掴む対象である瓶などの物体は、属性としての5つの対象より成立しているため、5つすべてを対象にしていると考えられる。

は身体的なもの（adhyātma）と言われる[15]。一方、この5つからなる両方においても、マナスは一緒に作用するものである[16]。

jñānendriyagaṇaiś caitad vikalpaṃ tanute manaḥ /

vikalpo vividhā kḷptis tac ca proktaṃ viśeṣaṇam // LT 5.68

そして、このマナスは、諸々の知覚器官によって、分別（vikalpa）をなす。分別は、それぞれ異なった成立（vividhā kḷptiḥ）[17]であり、そして、それは区別（viśeṣaṇa）と呼ばれる[18]。

dharmeṇa saha saṃbandho dharmiṇaś ca sa ucyate /

vikalpaḥ pañcadhā jñeyo dravyakarmaguṇādibhiḥ // LT 5.69

それは、特性（dharma）と特性を持つもの（dharmin）との関係であると言われる。実体（dravya）・運動（karman）・性質（guṇa）などによって、5種の分別（vikalpa）が知られるべきである[19]。

daṇḍīti dravyasaṃyogāc chuklo guṇasamanvayāt /

gacchatīti kriyāyogāt pumān sāmānyasaṃsthiteḥ // LT 5.70

ḍitthaḥ śabdasamāyogād itīyaṃ pañcadhā sthitiḥ / LT 5.71ab

実体（dravya）に関連することによりダンディン（4階級のブラーフマンのこと？）という。属性（guṇa）の適用により白色という。運動（kriyā = karman）に結びつくことにより行くという。普遍（sāmānya）の近接により男性という。名称（śabda）との結合によ

15　知覚器官と同じく、発声器官（vāc）などの5つの行為器官は身体的なもの（adhyātma）と呼ばれ、音声（śabda）や取られるべきもの（ādeyam）などの行為器官の5つの作用対象は物質的なもの（adhibhūta）と呼ばれる。

16　マナスの作用は知覚器官と行為器官に関連している。*Sāṃkhyatattvakaumudī* 27によれば、マナスは知覚器官と行為器官の両方の性質を持ち、知覚器官と行為器官はマナスの管理を受けて対象に作用することができると説かれる［金倉 1984: p. 161］。

17　Guptaによれば、“vikalpa” は “vi+kḷp” から導かれた語で “standing in relation to diverse (natural phenomena)” を意味し、それ故、その特性である “viśeṣaṇa” は対象に対する偏向した知識であるという［Gupta 2000: p. 33］。

18　マナスの機能について、*Sāṃkhyatattvakaumudī* 27では、「それ（マナス）を、〔他のインドリヤと〕共通でない形態によって定義して、“saṅkalpakam atra manaḥ”（この中でマナスは思惟するものである）という。思惟するものという形態によってマナスは定義される。感覚器官により知覚された「これなる事物」という不明瞭なものを、〔マナスは〕「これはこのようである、このようでない」と正しく分別する、〔すなわち〕区別するものと区別されるべきものの状態によって区分する、ということであろう。」（(3) tad asādhāraṇena rūpeṇa lakṣayati — “saṅkalpakam atra manaḥ” iti. saṅkalpena rūpeṇa mano lakṣyate. ālocitam indriyeṇa ‘vastv idam’ iti sammugdham ‘idam evam, naivam’ iti samyak kalpayati viśeṣaṇaviśeṣyabhāvena vivecayatīti yāvat.［Bhaṭṭācārya 1967: p. 195］）と説かれる。

19　認識対象の分類として、実体（dravya）、運動（karman）、性質（guṇa）、普遍（sāmānya）、名称（śabda）の5種を挙げる。Guptaは、それぞれを “matter, quality, function, genus, species” と説明する［Gupta 2000: p. 33］。ヴァイシェーシカ学派は6つのカテゴリー（padārtha）として、実体（dravya）、属性（guṇa）、運動（karman）、普遍（sāmānya）、特殊（viśeṣa）、内属（samavāya）を挙げており、その内LTの説と4つが一致する。

りディッタ（人の名前？）という。これが〔分別（vikalpa）の〕5 種のあり方である[20]。

karmendriyagaṇaiś caitat saṃkalpaṃ tanute manaḥ // LT 5.71cd

audāsīnyacyutir yā sā saṃkalpodyoganāmikā / LT 5.72ab

そして、このマナスは、諸々の行為器官によって、思惟（saṃkalpa）をなす[21]。無区別（audāsīnya）の消失というもの、それは思惟する働きという名称に関連する[22]。

ahaṃkāreṇa caitasminn ubhayatra gaṇe sthitiḥ // LT 5.72cd

そして、アハンカーラとして、この両者の一群の中にある[23]。

jñānendriyagaṇe so ’yam abhimānena vartate /

deśakālānvayo jñātur abhimānaḥ prakīrtitaḥ // LT 5.73

mamādya purato bhātīty evaṃ vastu pratīyate / LT 5.74ab

まさにこれ（アハンカーラ）は、知覚器官の一群の中に、自己意識（abhimāna）[24] によって展開する。場所と時間の結びつきは、知者にとっての自己意識であると言われる。「今、私の前に現れる」と、このように事物が確認される[25]。

karmendriyagaṇe tv eṣa saṃrambheṇa pravartate // LT 5.74cd

saṃkalpapūrvarūpas tu saṃrambhaḥ parikīrtitaḥ / LT 5.75ab

一方、行為器官の一群の中に、これ（アハンカーラ）は欲すること（saṃrambha）によって展開する。実に、思惟することに先行する姿をとった欲すること（saṃrambha）が

20　特性を持つもの（dharmin）である認識する対象に対して、その特性（dharma）を 5 種の分別に基づいて把握する、ということを例示している。

21　*Sāṃkhyakārikā* 27 によれば、マナスの機能は思惟すること（saṃkalpa）である。LT 5.68 の註も参照。LT では、マナスの機能を 2 種類に分け、知覚器官に基づき分別すること（vikalpa）と行為器官に基づき思惟すること（saṃkalpa）としている。

22　感覚器官によって対象が把握された段階では無区別であるが、マナスによって区別されることにより、無区別ではなくなるということ。LT 5.58cd–59ab の註を参照。

23　両者すなわち知覚器官と行為器官の中にあるということは、一連の認識の際にアハンカーラが作用すると考えられる。

24　*Sāṃkhyakārikā* 24 でアハンカーラは自己意識（abhimāna）と説かれる［金倉 1984: pp. 155］。この自己意識（abhimāna）について *Sāṃkhyatattvakaumudī* では「〈自己意識〉とは。アハンカーラは自己意識である。実に、〔感覚器官で〕知覚し、そして〔マナスで〕思惟したもの、それに対して、「私は権威を与えられている」、「実に、私はこれに対して能力がある」、「これらの〔感覚器官の〕対象は私のためのみにある」、「私より他には誰もこれに関して権限を与えられていない」、「それ故、私である」という自己意識は、独自（＝個々人にとって別々）の機能であることから、それがアハンカーラ（自我意識）である。」（“(2) abhimānaḥ” iti. abhimāno ’haṅkāraḥ, yat khalv ālocitaṃ mataṃ ca tatra ‘aham adhikṛtaḥ’, ‘śaktaḥ khalv aham atra’ ‘madarthā evāmī viśayāḥ’ ‘matto nānyo ’trādhikṛtaḥ kaścid asti’ ‘ato ’ham asmi’ iti yo ’bhimānaḥ so ’sādhāraṇavyāpāratvād ahaṅkāraḥ.［Bhaṭṭācārya 1967: p. 178］）と解される。

25　アハンカーラの作用として、知覚器官で把握された対象が、いつどこにあるのか、自己と結びつけて定義されるということ。

言われた[26]。

buddhir adhyavasāyena jñānendriyagaṇe sthitā // LT 5.75cd

buddhir adhyavasāyārthāvadhāraṇam udīryate /

avadhāraṇam arthānāṃ niścayaḥ parikīrtitaḥ // LT 5.76

ブッディ（統覚機能）は、決定すること（adhyavasāya）[27]によって、知覚器官の中にある[28]。ブッディ〔の作用〕は決定することであり、〔それは〕対象を確定すること（avadhāraṇa）と言明される。諸々の対象にとって、確定することは、固く確信すること（niścaya）と言われる。

karmendriyagaṇe buddhiḥ prayatnena pravartate /

trayodaśavidhaṃ jñeyaṃ tadetatkaraṇaṃ budhaiḥ // LT 5.77

ブッディは、行為器官の一群の中に、努力すること（prayatna）によって、展開する[29]。まさにこの 13 種の器官（karaṇa）が、知者によって知られるべきである。

bāhyaṃ daśavidhaṃ jñeyaṃ tridhāntaḥkaraṇaṃ smṛtam /

trayoviṃśatir ete tu vikārāḥ parikīrtitāḥ // LT 5.78

外的〔器官〕は 10 種が知られるべきである。内的器官は 3 種が想定されている[30]。実に、これらは 23 の変異[31]であると言われる。

karaṇāni daśa trīṇi sūkṣmāṃśāḥ sthūlasaṃbhavāḥ /

etat sūkṣmaśarīraṃ tu virājaḥ parikīrtitam // LT 5.79

26　アハンカーラの欲すること（saṃrambha）という作用により行為に対する熱望が起こることによって、行為器官の作用が起こるということ。*Sāṃkhyakārikā* ではアハンカーラの作用は自己意識（abhimāna）のみで欲すること（saṃrambha）については説かれていない。

27　*Sāṃkhyakārikā* 23 においてブッディは決定すること（adhyavasāya）とされ［金倉 1984: pp. 149–150］、*Sāṃkhyatattvakaumudī* では「〈決知〉とは。〈ブッディとは決知である〉。機能と機能を持つもの（機能の主体）との間に、区別がないということを意図しているので。あらゆる行為者は、〔ある対象を、まず目で〕知覚し、〔次にマナスで〕思惟し、〔そしてアハンカーラで〕「私はこれに権威を与えられている」と固執し、〔最後に、ブッディで〕「これは私によってなされるべきである」と決定する。そしてそれから、〔行為を〕始める。以上は世間の定説である。」（(2) “adhyavasāyaḥ” iti. “adhyavasāyo buddhiḥ” kriyā-kriyāvator abhedavivakṣayā. sarvo vyavahartā ”locya matvā ’ham atrādhikṛta ity abhimatya karttavyam etan mayety adhyavasyati tataś ca pravartata iti lokasiddham.［Bhaṭṭācārya 1967: p. 171］）と説かれる。

28　アハンカーラと同じく、認識の際にブッディが作用すると考えられる。

29　LT 5.75cd–76 に説かれるとおり、ブッディの作用である決定すること（adhyavasāya）は知覚器官に関するものである。一方、行為器官の場合は努力すること（prayatna）である。アハンカーラと同じく、行為器官に関する作用は *Sāṃkhyakārikā* には説かれていない。

30　10 種の外的器官とは 5 知覚器官と 5 行為器官のことで、3 種の内的器官とはブッディ、アハンカーラ、マナスのこと。

31　サーンキヤ学派と同様のものが推定されるが、おそらく 5 粗大元素ではなく LT 5.38–43 において説かれる粗大な存在物（sthūlabhūta）と考えられる。粗大な存在物は、属性としての音声、接触、色、味、香りであり、それらの微細な状態が 5 粗大元素である［三澤 2018］。

（外的な）10 と（内的な）3 の器官は、粗大なものと結びついた微細な部分（＝微細な身体）である[32]。実に、ヴィラージュ[33]にとってのこの微細な身体（sūkṣmaśarīra）[34]が言われた。

vyaṣṭayaḥ sūkṣmadehāś ca pratijīvaṃ vyavasthitāḥ /
apavarge nivartatnte jīvebhyas te svayonijāḥ // LT 5.80

そして、集合体としての微細な肉体（sūkṣmadeha）は、生命（jīva）ごとに確立する。自己の胎より生まれたものたちは、最終的に、それぞれの生命（jīva）から戻る[35]。

anyonyānugraheṇaite trayoviṃśatir utthitāḥ /
mahadādyā viśeṣāntā hy aṇḍam utpādayanti te // LT 5.81

これら 23 は、相互の補助によって、生じた。実に、マハットから始まり差別体（viśeṣa）[36]で終わるそれらは、卵を生み出す[37]。

tad aṇḍam abhavad dhaimaṃ sahasrāṃśusamaprabham /
tasmin prajāpatir jajñe virāḍ devaś caturmukhaḥ // LT 5.82

それは、太陽（sahasrāṃśu）と同じ光を持つ黄金の卵になった[38]。

その中に、プラジャーパティ[39]という 4 つの顔を持った神であるヴィラージュが生まれた[40]。

32　ここでの粗大なものとは 5 元素などから形成される実際の身体のことであり、微細な部分とは 10 種の外的器官と 3 種の内的器官からなる微細な身体と考えられる。そして、それらが結合して生命（jīva）あるいは心身を形成するのであろう。Gupta は、10 の器官と 3 つの微細な器官（マナス、ブッディ、アハンカーラ）は粗大な結果すなわちヴァイカーリカ・アハンカーラとタイジャサ・アハンカーラから生み出されたと解する［Gupta 2000: p. 34］。しかし、この 2 形態のアハンカーラからは、10 の器官（5 知覚器官と 5 行為器官）とマナスが出現するのであって、アハンカーラとブッディは出現しない。

33　Gupta は微細な身体（sūkṣmaśarīra）が “virāja” であると解する［Gupta 2000: p. 34］が、*Upadeśasāhasrī* 17.64 において 4 つの段階のうちの覚醒状態のアートマンがヴィーラジュと呼ばれること［シャンカラ・前田 1988: p. 119］、*Mahābhārata* 12.328.14 においてヴィラージュとアニルッダが関連して説かれること、LT 2.49–58 において覚醒状態とアニルッダが同一視されていること［三澤 2015: pp. 310–312］から、ヴィラージュと微細な身体を区別して捉えた。しかしながら、LT 5.82–83 で説かれるヴィラージュとの関係が不明瞭である。

34　ブッディ、アハンカーラ、マナス、5 知覚器官と 5 行為器官の 13 種の集合体が微細な身体を形成する。*Sāṃkhyakārikā* 40 とその註釈において、Māṭhara 註と *Sāṃkhyatattvakaumudī* はこの 13 に 5 つの微細要素（tanmātra）を加えた 18 種を挙げ、Gauḍapāda 註はブッディ、アハンカーラ、マナスと 5 微細要素の 8 種を挙げている［金倉 1984: p. 195–196］［本多 1980: p. 488–489］。LT の説では、微細要素が除外されている。

35　LT 5.19 においてプラダーナは胎（yoni）と呼ばれる［三澤 2017: p. 51］。順次展開してきた諸原理は、それぞれ異なった生命として確立し、還滅に際してプラダーナへと戻ると考えられる。

36　粗大な存在物（sthūlabhūta）とその 3 種の状態のことと考えられる。Gupta は粗大元素のことであるという［Gupta 2000: p. 34］。また、*Sāṃkhyakārikā* 38 では、微細要素（tanmātra）が無差別体（aviśeṣa）、粗大元素が差別体（viśeṣa）と説かれる。

37　LT 5.16–17 において、トライーとブラフマーが卵を作り、ガウリーとシヴァがそれを割り、トライーとブラフマーが卵の中にプラダーナを作ったという［三澤 2017: pp. 50–51］。

38　＝ *Manusmṛti* 1.9ab

39　*Manusmṛti* では、黄金の卵の中に生まれたものはブラフマンである［渡瀬 2013: p. 21］。

40　*Ṛgveda* では、プルシャからヴィラージュ（遍照者、支配者）が生まれヴィラージュからプルシャが

virājaś ca manur jajñe manos te mānavāḥ smr̥tāḥ /

marīcipramukhās tebhyo jagad etac carācaram // LT 5.83

マヌはヴィラージュより誕生した。マヌよりかのマーナヴァ（マヌの子孫、mānava）が〔誕生した〕と言われ、マリーチを頂点とする[41]。その彼らより、動くものと動かないものからなるこの世界が〔誕生した〕。

prakāro ’yaṃ mamodyatyā leśatas te pradarśitaḥ /

svataḥ śuddhāpi cicchaktiḥ saṃviddhānādyavidyayā // LT 5.84

私の尽力によるこの分類が、わずかにあなたに開示された。また、知としてのシャクティ（cit-śakti）は本質的に清浄であるが、始まりのない無知に一致する[42]。

duḥkhaṃ janmajarādyutthaṃ tatrasthā pratipadyate /

śuddhavijñānasaṃbandhāc chuddhakarmasamanvayāt /

yadā dhunoty avidyāṃ tāṃ tadā sānandam aśnute // LT 5.85

そこにいる彼女は、誕生と老いなどにより引き起こされる苦しみを引き受ける。清浄な知との結びつきにより、清浄な行為の連続により、その無知をふるい落とすとき、そのとき彼女は至福に到達する[43]。

iti śrīpāñcarātrasāre lakṣmītantre prākr̥tasr̥ṣṭiprakāśo nāma pañcamo ’dhyāyaḥ

以上、パーンチャラートラ派の精髄『ラクシュミー・タントラ』における 第5章「物質的根源に関する創造の明示」。

生まれるとされ、そこでのヴィラージュは女性原理と見られるという［辻 1970: pp. 318–319］。*Manusmr̥ti* では、ブラフマンは自らを二分して、半分は男、もう半分は女となり、彼女の中にヴィラージュを作った。さらに男（プルシャ）ヴィラージュは苦行を行って、私（マヌ）を創造した。そして私（マヌ）は10人の聖仙（マリーチ、アトリ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、プラチェータス、ヴァスィシュタ、ブリグ、ナーラダ）を生み出し、彼らによってあらゆるものが生まれたという［渡瀬 2013: pp. 25–26］。23の原理をプルシャと見立ててそこからヴィラージュが生まれるというように考えれば、*Rgveda* と *Manusmr̥ti* の説を組み合わせたと解することもできるであろう。また、マハットなどを生み出すプラダーナはトライーとブラフマーによって卵の中に作られることから、循環的創造が含意されているのかもしれない。Krishnamacharya は「ここにおいて、まさに以前に言われた創造の段階が、マヌなどの創造と共にまとめて説かれた。」（“atra pūrvokta eva sr̥ṣṭikramo manvādisr̥ṣṭyā saha saṃkalayyocyate.”［Krishnamacharya 1959: p. 22］）と説明する。

41　マーナヴァは10人のマヌのことと考えられるが（LT 5.82参照）、「ナーラーヤニーヤ章」などで説かれるマリーチ、アンギラス、アトリ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスィシュタ、スヴァーヤンブヴァという8人の聖仙の可能性も考えられる。*Mahābhārata* 12.327.29 では、この8人の聖仙たちがプラクリティと呼ばれ、彼らよりあらゆる世界が誕生したとされる［三澤 2016: pp. 151–152］。

42　LT 3.15–17ab によれば、最高処である「知としてのシャクティ」は享受者性を獲得して、享受されるものとしての状態である無知に影響されるという［三澤 2015: pp. 318–319］。

43　LT 3.14–18ab において、「知としてのシャクティ」は、知（vidyā）によって無知（avidyā）が消滅したとき、支配者ナーラーヤナと支配者性シュリーの状態へと至るという［三澤 2015: pp. 318–319］。

参考文献

Belvalkar, Shripad Krishna ed. (1954) *The Śāntiparvan : being the twelfth book of the Mahābhārata : the great epic of India for the first time critically edited,*, Vol. Part 3. Mokṣadharma, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.

(1988) *The Mahabharatam*, Delhi: Nag Publishers.

Bhaṭṭācārya, Rāmaśaṃkara (1967) *Sāṃkhyatattvakaumudī*, Vārāṇasī: Motīlāla Banālasīdāsa.

Gupta, Sanjukta (2000) *Lakṣmī Tantra: A Pāñcarātra Text*, Delhi: Motilal Banarsidass.

Krishnamacharya, V. ed. (1959) *Lakṣmī-tantra: A Pāñcarātra Āgama*, Chennai: The Adyar Library and Research Centre.

Rāmānujācārya, M.D., Friedrich Otto Schrader, and V. Krishnamacharya eds. (1966) *Ahirbudhnya-Saṃhitā of the Pāñcarātrāgama*: The Adyar Library and Research Centre.

Schrader, F. Otto (1916) *Introduction to the Pāñcarātra and the Ahirbudhnya Saṃhitā*, Madras: The Adyar Library and Research Centre.

金倉圓照（1984）『真理の月光』，講談社.

辻直四郎（1970）『リグ・ヴェーダ賛歌』，岩波書店.

本多恵（1980）『サーンキヤ哲学研究　上』，春秋社.

シャンカラ・前田專學［訳］（1988）『ウパデーシャ・サーハスリー：真実の自己の探求』，岩波文庫，岩波書店.

三澤祐嗣（2015）「インド思想における世界構成原理の研究 ― サーンキヤ思想を中心として ―」，博士論文，東洋大学.

―――（2016）「インド思想における世界構成原理と身心論 ―「ナーラヤニーヤ章」第 326 章および第 327 章を中心として ―」，『国際哲学研究』，第 5 号，pp. 149–160.

―――（2017）「『ラクシュミー・タントラ』第 5 章訳註 (1) ―3 種のグナによる顕現 ―」，『東洋学研究』，第 54 号，pp. 47–58.

―――（2018）「『ラクシュミー・タントラ』第 5 章訳註 (2) ― マハットとアハンカーラの顕現 ―」，『東洋学研究』，第 55 号，pp. 51-59

渡瀬信之（2013）『マヌ法典』，東洋文庫，平凡社.

キーワード

パーンチャラートラ派、宇宙生成論、アハンカーラ、感覚器官、サーンキヤ